

前図で、B（必履修教科・科目）の部分が、習熟度別講座になります。A（必履修が望ましい教科・科目）も習熟度講座にしてもよいでしょう。例えば、学校の実情に応じて、数学Ⅰ、英語Ⅰにするか、それに理科Ⅰや国語Ⅰ・国語Ⅱを加えるか、が考えられます。必履修教科・科目のすべてを習熟度別講座にすることは、教員数、施設・設備の上からむずかしいでしょうし、また、教科の性格からいって必要のない場合もありましょう。

前図Bの習熟度別講座の部分は、習熟の程度によって、学年の学級を二つに分割するか三つに分割するかが、決まります。その場合の名称の工夫も大切です。「基礎・基本」とか、「普通」、「発展」とか考えられますが、「上」・「中」・「下」などのように、差別感を印象づける名称は避けた方がよいでしょう。

なお、習熟度別講座では、習熟度の低い方の講座については、人数を少なくして効果を図るとか、増単をするなどの工夫も必要です。この場合、問題になるのは、やはり、教員数と施設・設備です。同時講座を組むなどして、時間割編成上での問題も解決してゆかなければなりません。

前図D（選択必履修教科・科目）、E（自由選択履修教科・科目）の部分は、選択の幅をできるだけ広げて、生徒一人ひとりの習熟度や進路等に応じられる講座を組みます。

前述の福島県立相馬女子高等学校に、数学Ⅰと英語については習熟度別講座を組んで研究した報告があります。この2科目については、1年で単位が不認定になったものについて2年でさらに増単した上、習熟度別の再履修講座を設けて、学習の定着を図っています。

また、同校の研究した教育課程は、習熟度別講座編成のほかに、進路志望に応ずる類型制の工夫を、また、単位の分割認定を、あるいは、ホームルームのほかに、進路指導、生徒指導のための特設時間を設けて、習熟度別学習を、ガイダンスの面からバックアップしています。同校の教育課程をあげれば次の表1のとおりです。